仏教を身近にする伝道誌　　浄土真宗を弘める会

道標（どうひょう）

d o h y o

2020 冬季号

年間特集　「おてら」

第一回・新しい様式も10年経てば普通になる　井上 理津子さん

連 載

あなたのいのちの物語　死者はそこに生きている

伝承を科学する　物狂による歌舞・道行・理責め

道しるべ　霊 瑞 華

年間特集

「おてら」

第一回
井上 理津子

「新しい様式も10年経てば普通になる」

我が家のオンライン法要

私ごとで恐縮だが、8月に大阪市西区の実家（正確には、実家を継いでくれている義姉の家）で、「オンライン法要」を営んだ。

今年は両親の13回忌の年だったが、法要を営みたかった8月は、コロナ第2波の禍中。旦那寺（北区）に聞くと、「本堂はお使いいただけませんが、お宅でされるならどうぞ」とのことで、さて、どうしよう。大勢が集まるのはよろしくないし。と義姉とあれこれ考え、お坊さんに来てもらって4人だけ集まることにして、あとの親戚には、「そうだ、ネットでつなごう」を試みたのだ。

私ごとの上塗りでさらに恐縮だが、少しだけ我が親戚チームの事情をお話しすると、兄は米ロサンゼルスに住み、いとこたちは一人だけ大阪だが、あとは京都や三重在住。亡き両親にとって孫にあたる3人は、米ボストン、インド、盛岡に散らばっている。

こうこういう事情で、ズームで中継してみるので、よかったら参加してねと皆に伝えると、一様に二つ返事が返ってきて、法要当日、もれなく全員が家族ぐるみで参加。延べ16人がパソコン画面の向こうに顔を揃えたのだった。兄は移動中の車の中から参加していた。

しまった、お寺さんに予め録画しますと言っておかなかった、と当日ひやりとしたが、お坊さんがいらしてから伝えると、「どうぞどうぞ」と容易く承知してくださったのは、こうしたケースが珍しくなくなっているからだろうか。

さて、始まった読経の様子は、オンライン参加者たちには、仏壇に向かって座るお坊さんの背中しか見えなかったはずだ。法話も聞こえにくかったことだろう。

1週間後にほぼ同じ面子で、お斎ならぬオンライン食事会を行って、「退屈だった？」と聞いたところ、「そうでもない」と異口同音。三重のいとこは、「（故人の）写真と思い出の品をテーブルに並べて、コーヒーを飲みながら聞いた」、インドの娘は「朝食を食べながら、お経も話も乙なBGMだった」、赤ん坊のいる盛岡の息子は「（赤ん坊が）ぐずっても、気を遣わずにいられてよかった」。

お寺に対して思うこと

オンライン法要を主催しておきながら言うのも何だが、法要も軽くなったものだ。子どもの頃、母が法要の何日も前から家の中をピカピカに磨いていたことや、長じてからも喪服着用が当然の、なんだか「きゅうくつ」なものであったことなど、遠い昔だ。

と、利用者の立ち位置からしかモノを言えないが、だからこそお寺やお坊さんに対して思うこともある。

もっと「興味が持てる、短い法

法要はなんだか「きゅうくつ」なものだった。

話」をしてくださらないだろうか。ちょっとした「サービス」をしてくださらないだろうか。の2点だ。

旦那寺も我々も代替わりしているため、いわゆる寺檀関係的な話はナシでいい。高邁な話も不要。今回の我が実家の場合なら、例えば「13回忌って?」「お焼香はなぜ3回?」「今読んだお経の意味を現代風に言うと」などと目の前の個別の状況にリンクする題材を用いて、仏教の入り口に導いてほしいように思った。最初にキーワードを言うなど、聞き手に興味を持たせるスピーチの工夫がほしい。それを短時間で、というのが理想だ。ちょっとした「サービス」については、例えば「今朝、お宅のお墓の写真を撮ってきましたよ」と花一輪でいいので供えられた写真を見せられると、我々は大きく感激しただろう。

お寺が〝営業努力〟を欠落させたまま継続できてきたことが変だと思うようになった。

〝営業努力〟とお寺

翻って、そういった〝営業努力〟を惜しまないのが、話題になっているお寺なのではないだろうか。納骨堂をつくる、樹木葬墓地を設ける、イベントをするなど新しい事業を始めたお寺に取材に行くと、袖触れ合った人をあの手この手で引き寄せようとしておられると感心する。利用者を「さま」付けで呼ぶなど、ソフト面で一部過剰なことまで起きている。当初私には、まっすぐな営業努力は、お寺にそぐわないと思えた。しかし、営業努力系のお坊さんに多くお会いするうち、例えば普通の企業や商店なら当然の姿勢なのに、お寺がその「当然」を欠落させたまま継続できてきていたことの方が変だと思えるようになった。お布施が業務の対価でないというなら、利用者の満足度を上げる努力が不可分だと。営業努力は何人にとってもはしたないことではない。

「小さな営業努力が、大きな営業につながる」とは某広告代理店に勤める知人が、上司から口すっぱく言われるという言葉だが、お寺業界には、小さな努力を持ち込める隙間がいっぱいありそうだ。

新型コロナウイルスと共生時代に入り、葬儀会場での「密」を避けるため、お葬式の「事前焼香」が増えたと聞く。午後6時からのお通夜なら受付を4時からに早め「都合のいい時間に来場を」と案内し、早い時間に来た弔問客が随時焼香をする形だ。「ほとんどの会葬者が、お焼香を終えると帰る。お坊さんは完全にオプションになりましたね」と葬儀社の人たちは言うが、その形式のお通夜に参列してきた知人が「お坊さんがいない時間のお通夜は、クリープの入っていないコーヒーみたいだった」と愚痴った。ほら、またチャンス到来。事前焼香の人たちの心の隙間を埋める、お坊さんの新しい営業品目も考えてほしい。

新しい様式も、10年も経てばそれが普通になる。オンライン法要に話を戻すと、読経と法話以外にネット配信ならではのもう一つの〝見せ場〟も考案してほしい。

井上 理津子（いのうえ・りつこ）
ノンフィクションライター。1955年、奈良市生まれ。タウン誌記者を経てフリーに。葬送、色街、戦後民衆史などをテーマに執筆し、『葬送の仕事師たち』（新潮社、2015年。のち文庫）『いまどきの納骨堂』（小学館、2018年）『さいごの色街 飛田』（筑摩書房、2011年。のち新潮文庫）『すごい古書店 変な図書館』（祥伝社、2017年）など著書多数。近刊『絶滅危惧 個人商店』（筑摩書房、2020年12月刊行予定）『医療現場は地獄の戦場だった』（ビジネス社、2020年11月刊行予定。大内啓共著）。

Your Spiritual Stories
あなたのいのちの物語

13話目

「死者はそこに生きている」

津島 佑子

『ジャッカ・ドフニ――夏の家』

ジャッカ・ドフニは樺太（からふと）東岸のウィルタ族の言葉で「大切なものを収める家」を意味する。今はないが、網走にこの名をつけた小さな北方少数民族資料館があり、語り手は娘と息子とともに夏休みの旅行でそこを訪問した。入り口の前にあるカウラは夏の間に住む簡便な小屋でそこから狩猟に出た。この小屋のなかに三人で入り、住人のように写真に撮ってもらおうとポーズをとり写してもらった。

その後、八歳の息子は無残に急死し、その写真が二年余を経て、住まいから遠くない納骨堂の遺骨の前に造花とともに置かれている。「私自身が選んで入れておいた写真なのだが、扉を開けるたびにその写真に不意打ちをかけられたような軽い驚きを感じさせられる。」

亡くなる前に、マンション住まいの家族は母の土地に移り、新しい家を建てようと考えたことがあった。そして「私」の母も含めて自分が建てたい家の設計図を皆が思い思いに描いていた。息子が描いた設計図が残っていて、楽しいものだ。入り口を入るとすぐに落とし穴がある。近くに小さな「おねえちゃんのへや」と「おかあさんのへや」がある。「ひどいわね、わたしたちの部屋だけ、こんなに小さいの、と私が文句を言うと、息子はこともなげに、だってぼくの家だもん、と答えた。部屋を用意しただけでも、ありがたく思え、といった気持ちだったらしい。」

「ぼくのへや」と「あそびべや」が並び、続いて廊下があって「かけっこ」とあり、食堂の隣が「ふろ」で、その隣りが「バイキング」とあって、これはバイキング料理が気に入っていたせいだ。「ねこのへや」、「しょくぶつのへや」、「じっけんしつ」もあった。マンションでは一〇数匹のイモリやアマガエルを飼っていた息子らしい。

家を建てる計画は実行されなかったが、「私」は息子や娘や母と新しい家に住む夢を頻繁に見る。死んでこの世にいない息子だが、その息子を向こう側においやってしまうようなことはできない。「たとえそれがどんなに適確な、しかも一般的な言い方であるとしても、私は、息子が死んだという言葉を口にする人を恨み、腹を立てるのを通り越して、軽蔑してしまう。」息子は死んでいない、という意味は「私」にとって息子はそれほどリアルに実在し、いつでもどこからでも現れ出て喜びや傷みや悲しみをともにしていると感じるからだ。夢にもうつつにもよく現れる。

生死の境を超える「家」の不思議な逸話の最後。郵便受けになぜか糸ミミズが詰まったビニール袋が押し込まれていた。「私」は嬉しくなる。「糸ミミズが来たとなれば、次には大量のイモリが来なければならない。それが当然の筋道というものなのだ。大量のイモリが来たら、次は無論、あの子の番だ。」「私」の幻想だが誰もそのリアリティを否定できないだろう。

「我慢強く待ち続けた甲斐あって、ようやく息子の戻ってくるのも時間の問題となったのだった。……夏になれば、音も、光も、私の住まいに戻ってくる。」姿は見えずとも死者は生きていて、生者の喜びや傷みや悲しみとともにそこにいる。そこにこそいのちがある、作家はそう信じている。およそ三〇年を経て、東日本大震災の苦難を踏まえ、遺作というべき長編『ジャッカ・ドフニ――海の記憶の物語』が産み落とされる。

島薗 進（しまぞの すすむ）
1948年生れ。東京大学教授を経て、現在、上智大学大学院実践宗教学研究科教授、著書に、『神聖天皇のゆくえ』（2019年5月）『明治大帝の誕生――帝都の国家神道化』（2019年5月、春秋社）、『ともに悲嘆を生きる』（2019年4月、朝日新聞出版）、『いのちを〝つくって〟もいいですか』（2016年、NHK出版）、『宗教を物語でほどく』（2016年、NHK出版）がある。

伝承を科学する

物狂による道行・歌舞・理責め

能楽には物狂を主役にすえる作品がある。物狂は、幽霊ではなく、現実の生きている人物であり、何らかの理由によって、一時的に、狂気の行動をとる人物である。彼らの目立つ、激しい行動は、相手役との間に、緊張をはらんだドラマを生み出し、場面を展開させ、失せ人との再会という結末を導く。現代演じられる作品の中で〈蝉丸〉、〈雲雀山〉、〈百万〉、〈隅田川〉、〈三井寺〉、〈桜川〉、〈班女〉、〈花筐〉、〈柏崎〉の物狂は女性で、〈高野物狂〉、〈土車〉、〈木賊〉、〈弱法師〉は男性である。

人が物狂になる理由は、人間関係の喪失、すなわち親子間や夫婦間や主従間の不本意な離別にきわまる。人はしばしば拉致され、また自ら失踪した。物狂の能には、〈桜川〉〈花筐〉〈柏崎〉のように、失踪者からの手紙や形見が届けられる場面から、劇が始まる作品がある。手紙や形見は、残された者の心を強く動かし、やがて狂気の行動を導く。

狂気は、能のセリフの中にもある古い言葉だ。失せた子を探す〈百万〉の主役は「我が子に逢はせ狂気をとゞめ、安穏に守らせ給ひ候へ」と祈る。では、狂気はどのような行動を導くのか。

物狂の作品を見渡すと、狂気の行動は三つに分けられる。一つ目は、失せ人を探し求めての旅である。〈桜川〉では、宮崎から茨城まで。〈隅田川〉では京都から東京まで。〈花筐〉では福井から奈良まで。〈柏崎〉では新潟から長野の善光寺まで。かなりの長距離移動である。旅の行程そのものを歌う歌は、道行と呼ばれ、日本の文学や音楽では大切にされてきた。〈蝉丸〉の主役は、京都の北白川から逢坂の関までの短距離移動だが、たっぷりと道行を歌う。その一節に「狂女なれど心は清滝川と知るべし」とある。地名に、自らの心の清らかさを掛け合わせるのである。

二つ目。物狂は歌を歌い、舞を舞う。あたりを気にせずに歌い舞うのは、物狂が失せ人を捜索し、自身の苦境を強く訴えようとするからである。〈花筐〉では、慕う主君との再会をもとめる物狂の女に、脇役が「いかにも面白う狂うて、舞ひ遊び候へ」とリクエストする。女は、主君に対する恋慕の情を歌い、舞を舞う。

三つ目。物狂はしばしば、理屈を述べて、結界を越える。〈三井寺〉では、月夜のもと、物狂の女が、三井寺の鐘をつこうとする。僧侶はそれを、狂人だという理由で制止する。しかし女ははっきり言う。中国の聖人さえ、月に導かれて狂気したことがある。ましてや私のような狂人に、それが許されないわけがない、と。こうした理責めによって、物狂は、結界を越え、あるいは禁忌を破り、思いのたけを込めて歌い舞い、最後に目的をはたす。

捜索の旅に出て、歌舞で感情を表現し、言葉で筋を通す。物狂の行動力を、われわれも学び直すべきであろう。

〈花筐〉（シテ：浦田保親）(c) yasuchika Urata
主君からの別れの手紙と形見を受け取った場面。

藤田 隆則（ふじた・たかのり）
1961年山口県生まれ。大阪大学卒業。博士（文学）。京都大学助手、大阪国際大学助教授、ミシガン大学招聘教授をへて、現在、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター教授。専攻は、民族音楽学。主な研究対象は、日本の能・声明などの中世芸能および音曲。著書に『能の多人数合唱』『能の地拍子研究文献目録』『日本の伝統音楽を伝える価値―教育現場と日本音楽』『能のノリと地拍子―リズムの民族音楽学』など。現在は、日本の伝統音楽を次世代に伝えていくための応用的研究に従事。

天岸淨圓（あまぎし じょうえん）
1949年（昭和24年）生まれ。本願寺派布教使。
行信教校講師、大阪教区東住吉組西光寺住職。

霊瑞華

親鸞聖人は釈尊の説法を、
　如来興世の本意には
　　本願真実ひらきてぞ
　　難値難見とときたまひ
　　猶霊瑞華としめしける
と讃詠されている。

霊瑞華は不可思議の瑞兆として咲くといわれる。サンスクリット語の【ウドゥンバラ】の音写訳で「優曇華」「優曇鉢華」ともあらわされる。三千年に一度だけ花を開くそうである。経典には「実ありて、華あることなし」と説かれる。要するに花の咲かない植物である。

霊瑞華と漢訳されると仰々しく聞こえるが、実際は「イチジク」である。実と見えているのが花で、花がそのまま実である。だから花が花とは見られない。

仏典ではブッダの興世（出現）を霊瑞華に譬える。あり得ない程の大事が起こったという意味である。ただ、ブッダの出現といっても誕生の意味ではない。歴史的実在としてインドに誕生し、後にブッダと呼ばれたガウタマ・シッダールタにあうことではない。ブッダの説法を聴聞することである。

説法は説き手と聞き手があって成り立つもので、説き手、聞き手の一方だけでは成立しない。聞き手が説き手の言葉を受けいれて、その教えに帰依し、教えが主体化しなければ説法も聴聞も実は成立していない。故にブッダの興世も成立しない。その実現の希有性を霊瑞華をもって譬えたのである。

ここに用いられる「値」の字は「人」と「直」によってできている。意味は二人の人間が真っ直ぐに向きあっている状況である。完全な意思の疎通をあわす字といえる。

日頃から聴聞して仏教のことはよく知っている。でも、それは聴聞しているつもりではないのか……。はたして教えが主体化しているだろうか。宗教的知識の豊富さと信仰は全く別物である。人間は誰もが自己中心的に我がままに生きたいと願っている。だから本当は仏法などは聞きたくもない。まして、それを我が道と受けいれることは「難中の難」といわねばならない。

悟りを開いたブッダは人びとへの伝道を躊躇されたと伝えられている。当然かも知れない。聴聞とは、その「難中の難」が実現していることである。

編集後記

寺院は歴史的に、社会の中で様々な役割を果たしてきた。医療・福祉施設として、教育施設として、地域交流施設として。それらを包摂するのが、ひとのいのちの全体を貫き、無惨なことの多い人生に意味と方向性を与えていこうとする宗教施設としての役割であろう。

昨今、「寺院離れ」が叫ばれ、新型コロナウイルス感染症の脅威が、その傾向に拍車をかけている。

そんな状況の中、本誌では「おてら」と題した年間特集を組むことにした。これからの寺院のあり方について、さまざまな方面からのご意見をいただこうという企画である。

第一回は井上理津子先生。寺院関係者とは異なった視点から、忌憚のない提案をしてくださった。読者の皆様の中にも、「わが意を得た」と膝を打った方も少なくなかったのではないか。

変化していくべきこと、決して変化してはならないこと、それを見極めつつ、変化を恐れぬ柔軟さを持つことが求められているのだろう。「新しい様式も10年経てば普通になる」のだから。

（釈圓眞）

表紙の絵

成道の木

我が国では十二月八日を成道会としている。釈尊は三十五歳で悟り（成道）を得られたとされているが、その後の四十五年の説法の人生の間、さまざまな所でマーラ（悪魔）が出てくる。それは心の迷いであり、大般涅槃には至らなかったのだろう。釈尊が成道されたことで仏の教え（仏教）が流布していったのであるから、世界の仏教徒の間では成道が最も大切にされている。釈尊が八十才で入滅されて約五百年間は仏像が造られなかった。人から仏へと成られたので人の形で表現することがおこがましかったのだろう。その間、成道の象徴は「菩提樹」で表現された。四大事蹟と言い、成道の他、誕生は「蓮」、初めての説法は「法輪」、涅槃は「仏塔」で象徴的に表された。

畠中光享（はたなか こうきょう）
日本画家／インド美術研究家
／真宗大谷派僧侶

仏壇仏具のことは
お気軽にお問い合わせ下さい
株式会社 廣瀬佛檀店
0120-81-7065　06-6771-7007
タウンページ http://nttbj.itp.ne.jp/0667717007/（詳細地図有り）
〒543-0062 大阪市天王寺区逢阪2丁目1-12
（四天王寺西門交差点　西へ30m）

仏教を身近にする伝道誌 道標 二〇二〇年 冬季号 2020年12月1日発行 発行所／浄土真宗を弘める会 萬福寺内 大阪市西区南堀江1-14-23 tel.06-6531-1328 fax.06-6531-1327 e-mail：ktda8.10@gmail.com